名古屋白龍「監視カメラ撤去裁判」

加速する監視社会

マンション建設反対したら?

「複数カメラ 生活包囲」

写真は東京新聞 9 月 6 日朝刊「こちら特報部」。名古屋白龍の住民の方からメールなどで知らせてもらったが、こうして新聞でじっくり読むと感慨もひとしおだ。多くの人に知ってもらいたいので、記事を抜粋して紹介したい。

「24 時間、玄関の出入りを撮影された。誰がいるか常に把握されているようで、とても気持ちが悪かった」。名古屋市瑞穂区の薬剤師奥田恭正さん(63)は、防犯カメラを自宅に向けられた体験をこう話す。

2015 年秋、自宅向かいの 15 階建てマンションの建設計画に反対し、周辺住民約 20 人で「住環境を守る会」を結成。日照を遮られる恐れがあるとして、建設業者側に階数を減らすなど見直しを求めたが聞き入れられず、現場周辺にのぼり旗を掲げるなどして抗議を続けた。

16 年 7 月に工事が始まると業者は現場に仮囲いをし、防犯カメラ 7 台を設置。うち何台かは、奥田さんら反対する住民の自宅に向けられていた。周辺の人通りだけでなく、奥田さんらの抗議活動や、打ち合わせで近所の家に集まる様子も記録したとみられる。奥田さんは「もっと大きなマンション建設現場でも防犯カメラはせいぜい 2、3 台。計画に反対した私たちへの嫌がらせとしか思えない」と憤る。家族は外出するたびに撮影されるのを嫌がり、普段は行かない通りを使うなど不便を強いられた。抗議活動に参加する住民も奥田さんを含め数人に減った。「カメラによって活動が萎縮させられた」

奥田さんら 4 人は 17 年 10 月、憲法で保障されているプライバシー権や集会の自由を侵害されたとして、精神的苦痛の慰謝料などを建設業者側に求め、名古屋地裁に提訴。5 日に判決があり、地裁は、奥田さん宅とは別の家に向けられた 1 台について「嫌がらせ的な意図で設置したと疑われる」と判断し、賠償を命じた。原告代理人の中谷雄二弁護士は「カメラが野放しに設置されている状況で、画期的な判決だ」と評価する。

カメラの怖さは監視の圧力だけではない。奥田さんは 16 年 10 月、現場監督の 50 代男性を突き飛ばしたとして逮捕、起訴された。取り調べで容疑を否認しても警察官から「カメラに写っとる」と追及された。ところが法廷で公開された映像は、奥田さんが腕組みをして工事車両の出入り口に近づき、それを押し返そうとした現場監督がバランスを崩した場面が写っていただけだった。同地裁は 18 月 2 月、奥田さんが突き飛ばしたとは認められないとして無罪判決を出した。「捜査機関の能力や使い方によっては、防犯カメラで冤罪が生まれる可能性がある」と危ぶむ奥田さん。不当に逮捕されたとしてとし、国や愛知県に損害賠償を求めて係争中だ。

(2019 年 9 月 18 日)